

李東勳『在朝日本人社会の形成—植民地空間の変容と意識構造—』明石書店、2019年。

**\*本の概要:**

本書は、在朝日本人の歴史について、植民者の意識構造、植民地空間との関わりという視点から考察したものである。一般民衆の入植が植民地統治権力の樹立に先行した朝鮮では、植民者社会の特質は社会形成の過程に起因して生まれた。このことを踏まえ本書では、在朝日本人の歴史を六つの時期に区分し、そのうち開港期から、二世が社会に登場する成長期以前までの期間を研究の対象とした。第一部では、各種統計、居留民団体、児童教育事業を取り上げ、植民者社会の形成過程と社会様態を考察した。第二部では、朝鮮物産共進会、港湾「開発」、居留民神社を取り上げ、在朝日本人社会が植民地空間に及ぼした影響を考察した。最後の補論では、朝鮮地誌刊行を取り上げ、在朝日本人の意識構造を分析した。在朝日本人社会の形成過程、社会様態、植民地空間との関わり、「植民者意識」という多様な観点から、植民者社会の形成を鳥瞰するのが本書の課題であった。

**\*著者略歴:**

1976年、韓国大邱生まれ。2003年、韓国外国語大学日本語科卒業。2007年、文部科学省国費研究留学生として渡日。一橋大学社会学研究科研究生課程を経て、2008年東京大学大学院に入学。2016年、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程満期退学。2017年、博士(学術)。現在、韓国啓明大学非常勤講師。

[関連 URL] <https://www.akashi.co.jp/book/b470951.html>